

皇太子ご夫妻が見入った土器

西都原考古博物館の総合案内を過ぎると一際目立つ大型の縄文土器（深鉢）が展示されている。この土器は、現在開催中のコレクションギャラリー展「宮崎県の考古学～学史に刻まれた人々～②」（2021（令和3）年9月8日～9月26日）にて取り上げた曾我部長良¹⁾にまつわる代表的な遺物である。曾我部自身が綾町尾立遺跡²⁾にて発見したもので、宮崎考古学会が1956（昭和31）年に発掘調査を実施した箇所から東へ100m程の地点にあったという。

土器の復元は自ら行い、米粒を「のり」にしたものを接着剤として土器片同士を接合し、欠けた部分に石コウを入れて修復した。長年のフィールドワークの中で収集した遺物のなかでも特に気に入っており、生前手放すことはなかった。彼の著書である「日向の横穴」（1979 曾我部）の巻頭写真で紹介している他、「日本の古代遺跡 25 宮崎」（1985 鈴木）等にも掲載されている。

また、1962（昭和37）年に皇太子（現上皇）ご夫妻が来県された際、県立博物館（現総合博物館）に展示され、ご夫妻の目にとまると新聞で報道されている。

曾我部の没後、2008（平成20）年度に遺族から県総合博物館に寄贈された。しかし、土器片を接合する接着剤や石コウ等による復元部分の劣化と、歪みもみられることから、同館にて再修復作業が行われ、より正確な形に復元された。

この縄文土器は、綾式土器（宮之迫式土器）と呼ばれる縄文時代後期前葉（約4,000年前）の土器で、口唇部は見つからないものの底部まで揃っている。復元した器高は46.0 cm、口径は41.5 cmと



綾式土器（県総合博物館所蔵）



町指定史跡 尾立遺跡（綾町）



文様の様子

なり、口縁部はおそらく、平口縁になると考えられる。

文様は、土器の頸部から胴部上半にかけて平行沈線文による渦巻状や横にした凹字状、弧状で構成されている。また、沈線間には貝殻腹縁による連続刺突文（疑似縄文）が充填されおり、瀬戸内地方の磨消縄文土器の影響を色濃く受けている。

なお、底部には土器製作時に土器の底に敷いた編組製品の痕跡（網代圧痕）が残されている。

当時、県内ではこれ程の大型品で完全に近い形で復元されたものは珍しく、南九州最大の土器（1985 鈴木）と紹介されるなど、県立博物館としてはのどから手が出るほど欲しい一品として新聞で紹介されている。また曾我部自身も土器片を畳一面に広げて、3か月以上もかけて復元した苦勞からか大変な思い入れがあり、自宅の一室に飾っていたという。

その圧倒される大きさや文様の派手さ、曾我部のそうした思いも伝わったのか、皇太子ご夫婦がその土器をご覧になった際、熱心に見入られたのかもしれない。

（日高広人）

【註】

1) 1908（明治 41）年愛媛県生まれ、1955（平成 7）年死去。本県の横穴墓研究の先駆者で、戦前から横穴墓の調査を行う。確認した横穴墓は 1,048 基で、その成果を「日向の横穴」や「日向の横穴 続編」（1986 曾我部）の 2 冊まとめた。これらの成果は、県内横穴墓研究の基礎的資料となっている。

2) 綾式土器の標識遺跡で東諸県郡綾町大字北俣に所在する。遺跡の発見は、明治末から大正の初めに遡り、1918（大正 7）年の濱田耕作・梅原末治の両者による調査など、大正・昭和を通じて多くの研究者による調査が実施されている。なお遺跡の一部は、1980（昭和 55）年に町史跡としている。

3) 宮崎県南部に分布する後期前半の土器。1939（昭和 14）年に小林久雄によって型式設定された土器で太い沈線で施された曲線文を有する土器を綾村 a 式土器、沈線間にアナガラ属の貝殻復縁で疑似縄文を施した土器を綾村 b 式とした。しかし両者には時間差がなく、セットとしての見方から同一型式として考えられている。現在では、従来の岩崎式土器や綾式土器の名称を使用せず、宮之迫土器と呼ぶ場合もある。

【参考文献】

鈴木重治 1985 『日本の古代遺跡 25 宮崎』保育社

曾我部長良 1975 『日向の横穴』

曾我部長良 1986 『日向の横穴 続編』

曾我部長良 1989 「石川恒太郎先生の米寿を祝して」『宮崎考古』石川恒太郎先生米寿記念特集号 上巻 宮崎考古学会

宮崎県史 1989 『宮崎県史 資料編』考古 1

宮崎日日新聞 1980. 2. 5 朝刊「いまこそ見直せ ふるさとの文化財 追跡秘蔵遺産（1）」

戸沢充則 1994 『縄文時代研究事典』東京出版社